

免疫ふしぎ未来2025に初出展

総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点は、7月27日（日）、東京お台場にある日本科学未来館で開催された「免疫ふしぎ未来2025」に初めて出展しました。

本イベントは、日本免疫学会が主催し、文部科学省が後援する、“「聞こう!「話」そう!! やって「見」よう!!!”をキャッチフレーズに、子どもから大人まで幅広い世代が免疫の仕組みや最新研究を楽しく学べる体験型の科学イベントです。難しく感じられがちな「免疫」を、身近で興味深いテーマとして紹介し、科学や健康への関心を高めることを目的としています。当日は約1,600名が来場しました。

今回の出展は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）先進的研究開発戦略センター（SCARDA）が推進する「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」におけるアウトリーチ活動の一環として実施されました。同事業に参画

する5つの拠点機関（北海道大学、東京大学、千葉大学、大阪大学、長崎大学）がそれぞれブースを構え、模型などを使いながら、研究テーマを子ども向けにわかりやすく解説しました。

会場内には、顕微鏡観察や実験体験、模型やゲームを使った免疫の仕組み紹介コーナーなど、参加者が手を動かして学べる多彩な企画が並びました。また、第一線で活躍する免疫学者によるトークセッションでは、本拠点の兼務教員である前仲勝実教授（薬学研究院）が「抗体がウイルス感染を防ぐ様子を見る」と題し、新型コロナウイルスを例に、ウイルスと抗体の“戦い”をどのように観察し、薬やワクチン開発に役立てるかを紹介しました。さらに、医療関係者が直接説明を行い、来場者の質問に答える場も設けられました。その他、子ども向け科学工作教室や、遺伝子病制御研究所の高岡晃教授が主宰する児童向け寸劇「免疫戦隊まもるんジャー」を開催し、研

究者がT細胞やB細胞、マクロファージなどに扮し、楽しく免疫の仕組みを伝えました。

本拠点のブースには多数の来場者が訪れ、子どもの視点からワクチンについて考える貴重な機会を提供できました。イベント後の来場者アンケートでは、約98%が「免疫への関心が高まった」と回答がありました。情報発信・情報収集の両面で非常に有意義な場となり、次世代への科学啓発にもつながりました。

初出展となった今回は手探りの部分もありましたが、得られた経験を活かし、来年度も継続出展を予定しています。今後も若い世代へのワクチンの重要性の発信や、若手人材育成の推進、社会との交流を一層深めてまいります。

（総合イノベーション創発機構
ワクチン研究開発拠点）



ワクチン研究開発拠点ブースとインフルエンザウイルスの模型を被った職員



トークセッションで講演された前仲教授（中央）とワクチン研究開発拠点事務局 猫塚和美室長（右側）



児童向け寸劇「免疫戦隊まもるんジャー」